

ビデオ会議システムを介した遠隔接触場面における言語管理

——「turn-taking」と処理過程をめぐって——

尹 智 鉉*

キーワード: ビデオ会議システム, 遠隔接触場面, turn-taking, 言語管理

要 旨

従来, 接触場面の研究は母語話者と非母語話者が同じ空間を共有している対面の場合に集中していたが, マルチメディアやネットワークなどの技術的發展に伴い, 日本語学習者の参加する接触場面が「対面場面」に加え, 新しい「遠隔場面」にまで幅を広げてきている。近年, 新しいコミュニケーション・ツールとして期待されているものに「ビデオ会議システム」というパソコンを介した双方向の通信映像システムがある。

本稿は, このようなシステムを介した遠隔接触場面には, どのようなインターアクション問題が存在し, 参加者にいかに認識され, いかに管理されているのか, その言語管理のプロセスに注目したものである。遠隔接触場面の特徴を明らかにするために, 談話分析の方法を用い, turn-taking の観点から対面接触場面との比較を行った。遠隔接触場面の場合, 時間的ずれが存在するため, turn-taking が上手くできず, 同時発話や不自然なポーズになってしまう可能性が高いからである。

分析の結果, 遠隔接触場面において turn-taking と関連するインターアクション問題がより多く発生し, 言語管理が行われていたことが明らかになった。また, インターアクション問題に対する調整遂行の役割は日本語学習者より母語話者が, そして中級学習者よりは上級学習者が積極的に行っている傾向が示され, turn-taking の問題処理においては非母語話者の習得レベルより接触場面の種類が深く関連していたことも確認された。

1. はじめに

日本語教育においても「接触場面(ネウストブニー 1995)」の研究が活発になってきた(ファン 1998, Miyazaki 1999, 宮崎 2002b 等)が, 未だ接触場面における多様化の問題は十分に考慮されていないと思われる。そこで最近, 接触場面での参加者におけるバリエーションや, 接触場面が行われる環境に関しても, 実際に対面していない参加者間で行われる場合への認識が指摘さ

* YOON Ji-Hyun: 早稲田大学大学院日本語教育研究科。

れている(宮崎 2002a)。

従来、接触場面の研究は母語話者と非母語話者が同じ空間を共有している、いわゆる対面(face-to-face)の場合に集中していたが、近年、グローバル・ネットワーク時代の到来に伴い、教育を取り巻く情報通信環境も大きく変わりつつある。実際、日本語学習者らは生活の中で電子メール、チャット、テレビ電話などを使い遠隔地の相手とコミュニケーションを行うようになり、日本語学習者の参加する接触場面が「対面場面」に加え、新しい「遠隔場面」にまで幅を広げているのである(尹 2002)。しかし研究分野では、遠隔接触場面に関するものが未だ数少なく、その内容も、電話の談話研究(町田 1995, 1997 等)に限られているのが現状である。そこで本稿では、以上のような日本語教育の実情を踏まえた上で、接触場面のバリエーションという観点から、ビデオ会議システムを介した日本語母語話者と日本語学習者が参加する 1 対 1 のインターアクションを具体的に検証することにする。

2. ビデオ会議システム

2-1. 定義及び特徴

近年、マルチメディア通信ネットワークの新しいコミュニケーション・ツールとして期待されているものに「ビデオ会議システム (Video-conferencing system)」がある。これは、パソコンを介した双方向の通信映像システムで、デスクトップ用小型カメラによって映し出されるお互いの映像を見ながら、ヘッドセットのマイクを通して、音声によるリアルタイムのインターアクションを可能にしたものである。同時に、画面上の電子ボード(ホワイトボード)内で写真や図、キーボードから入力された文字などの、様々なコミュニケーションのチャンネルを使ってインターアクションできる機能も持っている(宮崎 2001)。

ビデオ会議システムの映像の鮮明度は、会話が違和感なくできる程度であり、同じ画面に、自分自身の映像を表示する「ローカルウィンドウ」と相手の映像を表示する「リモートウィンドウ」、そして電子ボードとも呼ばれる「ホワイトボード」の全てが表示できる。しかし、映像の送信スピードが最大 1 秒間約 25 コマであるため、音声情報と映像情報の送受信において時間的ずれが発生する。このような弱点を持つにもかかわらず、このシステムが注目されている最大の理由は、対面会話の持つ、① お互いの顔が見える、② 双方向性、③ 同時性の特徴を最も多く備えていることである。これを利用することによって、第二言語または外国語学習者が、ネイティブスピーカーを含む多くの人々と目標言語でコミュニケーションできる環境が提供され、学習者のインターアクション能力や自律学習能力の発達を促す機能をもたらすと考えられる。山本(2000)は、通常のクラス単位で行われる教育方法と比較し、とりわけ「学習の個別化」、「学習の継続可能」、「ネットワーク形成の機会提供」という点において、優れた学習環境を提供できる

ものであると述べている。

2-2. 先行研究

現在、ビデオ会議システムは幅広い分野で注目を集め、様々なアプローチによる研究が活発に行われている。まだ現状では、理工系の研究によるものが多く、映像や音質などシステム自体の改善を図るものが、その大部分を占めている。しかし、第二言語習得におけるビデオ会議システムの利点と問題点を徹底的に検証しないまま、将来の理想的方向性を論ずることはできない。日本語教育の分野においても、ビデオ会議システムが、日本と海外の日本語教師、日本語学習者、その他の日本語教育関係者間での情報交換に、どの程度効果的に機能するのかを調べる必要があると指摘されている(宮崎 2002a, 2002b)。そこで、本稿の内容と比較的関連性が高いと思われる二つの理工系論文を紹介し、その示唆するところを考察することにする。

福永ら(1993)では、円滑な会話を進めるためのシステムの改善を図るといった研究目的のもとで、ビデオ会議システムを介したコミュニケーションの円滑な意思疎通を阻害する要因として、画面の画質や大きさの問題、画面の閉塞性、空間の非共有、視線の不一致、距離感と物理的接触の欠如を取り上げている。また、ビデオ会議システムを介したコミュニケーションにおける「識別性の問題」、すなわち複数の相手から特定の相手を識別しにくい問題を記述している。対面コミュニケーションの場合、相手の名前を呼ぶ以外にも、言いたい相手に視線を向けたり、顔や体を向けたり、あるいは指で指すなど、非言語情報を有効に利用して会話の相手を識別している。しかし、ビデオ会議システムでは、映像に移っている人がどこを見ているのかわからないため、非言語を使い、会話の相手を識別することができないのである。このような問題意識から、共通表示環境¹、個別表示環境²、視線一致環境³、対面環境の四つの会話に、同じ被験者に参加してもらい、参加者による主観評価と会話構造の分析を行った。

調査の結果は、まず、主観評価においては、識別性を改善した個別表示環境と視線一致環境が、従来の共通表示環境に比べ、参加者にとってコミュニケーションが円滑に進む環境であることが確認された。発話回数、発語数、発言遷移からみた会話の構造分析に関しては、個別表示環境と視線一致環境の会話構造は、共通表示環境よりも対面環境に非常に類似した結果を示した。このような結果は多地点の個人参加によるビデオ会議システムの使用に重要な意味を示している。

また植松ら(1994)では、ビデオ会議システムの使用過程における参加者の「習得」を考察するため、同じ4人組が参加する、ビデオ会議システムの使用一回目、二回目、三回目の会話と対

¹ 分割画面を使用し、全ての映像が、正面にある同じ画面に同時に表示される状況。

² 複数の画面を用意し、自分以外の参加者の映像が個別に表示される状況。

³ カメラが画面の上にあるため、各参加者の映像はやや下を見ている映像になり、視線を合わせるができない。そこで、個別表示環境の各画面の前にハーフミラーを設置し、ミラーに映った映像をカメラで撮って送ることにより視線一致を可能にした。

面会話の四つのデータを比較し、分析を行った。その結果、会話時間及び会話頻度においては、各条件で有意な差はみられなかった。一方、同一画面表示環境であることから、福永ら(1993)と同じく、誰が誰に話しかけているか分かりにくいといった問題を取り上げている。但し、この調査では「識別性の問題」を解決するために参加者が用いる「方向性言語」に注目し、例えば「おれ」「私」など、自分に対して方向を表す「自称方向性言語」と、「さん」「氏」など特定の会話相手を表す「他称方向性言語」を分析項目として設けている。この分析の結果、自称方向性言語の1時間当りの使用回数は、対面会話が35.1回、ビデオ会議システムの使用一回目が51.8回、二回目が56.1回であった。一方、他称方向性言語に1時間当りの使用回数は、対面会話が13.9回、ビデオ会議システム使用の一回目が46.7回、二回目が74.3回の数値を示した。このような結果から、遠隔コミュニケーションにおいては、話しかける相手を明確に指定し、また、自分に注目させるためには、方向性言語を多用する必要があることを、参加者達が経験から習得していったことが分かる。この研究は、ビデオ会議システム使用における様々なインタラクティブ問題に対して、参加者による認識と管理が行われ、延いては、持続的使用による「言語管理のプロセス」の習得可能性を示したという点で、大きな意義を持つ。

3. 研究目的

ビデオ会議システムは既に第二言語習得を含む様々な教育分野に導入されているが、教育のリソースとして完全に開発されていないのが現状である。そのため、日本語教育における有効性と利点を検証し、日本語教育の新しい場면을模索するとともに、ビデオ会議システムを介した接触場面のインタラクティブ問題を明らかにし、今後のシステム開発にも積極的に提案していくべきである。母語話者(Native Speaker, 以下 NS)なみの言語能力を備えていない日本語学習者、すなわち非母語話者(Non-native Speaker, 以下 NNS)において、遠隔接触場面に参加し、目標言語によるコミュニケーションを行うのは容易なことではない。ビデオ会議システムが電話の場合と異なり、聴覚と視覚の空間を同時に提供できるとはいえ、遠隔コミュニケーションには映像や音声などのシステムの制約が存在するため、やはり対面の場合とは異なるコミュニケーションをせざるを得ない。その理由としては、視線の不一致、映像と音声の時間的ずれ、そして空間の非共有による心理的距離感が挙げられる(尹 2003a)。

誰から誰に、発言が移ったのかという turn-taking は、会話参加者のインタラクティブ性をよく反映し、対面接触場面と遠隔接触場面におけるコミュニケーションの違いを明らかにする上で、大事な項目の一つであると思われる。そして、遠隔接触場面においては、音声と映像の時間的ずれが存在するため、turn-taking が上手くできず、同時発話や不自然なポーズになってしまう可能性が高い。

本稿では、遠隔接触場面の特徴を明らかにするために、談話分析の方法を用い、turn-takingの観点から対面接触場面との比較を行った。対面接触場面に比べ遠隔接触場面にはどのようなインターアクション問題が存在し、接触場面の参加者によって、いかに認識され、いかに管理されているのか、その言語管理のプロセスに注目し、最終的には、第二言語習得における活用性や日本語教育への応用性を提案することを本稿の目的とする。

4. 調査概要

本稿では、同じ参加者による「1対1」の対面接触場面と遠隔接触場面から談話データを収集し、両場面におけるインターアクション問題の発生から問題を解決しようと調整が遂行されるまでの言語管理のプロセスをturn-takingの側面から検証した。

4-1. 参加者

実験参加者は、日本語母語話者8人、日本語中級学習者4人、上級学習者4人で、2002年5月から6月にかけて、計8組の16会話を収録した。NSは、日本語教育を専攻とする大学院生で、個人差はあるものの、全員日本語教師の経験を持つ。NNSは全員、早稲田大学日本語研究教育センター別科日本語専修課程の学生であり、調査時点で口頭表現⁴レベル6とレベル8の受講者であった。

表1 NSのプロフィール

	性別	年齢	専門		性別	年齢	専門
NS1	男	30代	日本語教育	NS5	女	30代	日本語教育
NS2	女	20代	日本語教育	NS6	女	20代	日本語教育
NS3	女	20代	日本語教育	NS7	女	30代	日本語教育
NS4	女	30代	日本語教育	NS8	女	40代	日本語教育

⁴ 早稲田大学日本語研究教育センター別科日本語専修課程は、各機能別に1から8までのレベルを設けている。レベル1から3までを初級、レベル4から6を中級、レベル7と8を上級とみなすことができる。

表2 NNSのプロフィール

	性別	年齢	出身国	母語	学習歴	来日時期	レベル
NNS1	男	32	台湾	台湾語	5年	2001.9	6
NNS2	女	23	香港	広東語	3年	2001.9	6
NNS3	女	24	台湾	台湾語	4年	2001.9	6
NNS4	男	27	台湾	台湾語	2年	2000.9	6
NNS5	男	22	中国	中国語	10年	2001.9	8
NNS6	女	21	中国	中国語	2年半	2001.9	8
NNS7	女	21	韓国	韓国語	2年	2001.9	8
NNS8	女	23	中国	中国語	4年	2001.9	8

4-2. 設備および場所

遠隔接触場面の収録は、システムが設置されている場所にその使用が限定されるため、早稲田大学西早稲田キャンパスと戸山キャンパスにあるパソコンを使用、インターネットで接続し調査を行った。本調査で使われたビデオ会議システムは、パナソニック社の「テレミート (Telemeet) ver1.0」という製品である。ヘッドセットとマイクからの NS 及び NNS の音声全てを録音するため、西早稲田キャンパスのほうのパソコンに特殊装置を設け、遠隔接触場面の談話を収録した。録画はインターアクションの妨げにならないよう、NS の後ろにビデオテープレコーダーを設置して行った。また、対面接触場面の収録は、早稲田大学西早稲田キャンパスの教室や共同研究室を利用して行われた。

4-3. 実験手順およびトピック

表層に現れていない部分、特に参加者の意識までを調査の対象とする「問題分析」を行うためには、実験を行う前と後の調査全段階で得られるデータの収集にも細心の注意を払わなければならない。実験では録音と録画を行い、このデータから得られた文字化資料を本調査の1次データとして、そしてインタビューやフォローアップ・インタビューのデータ収集にも心掛け、その内容を2次データとして使用した。

まず準備段階では、システムの使い方及び実験の手順、タスクの内容などを説明した。両方の説明が終わった段階で、インターネットで指定されたパソコンをつなげ、約20分間会話を行うよう指示を出した。

談話収録の場面は具体的に三つのセッションで構成された。遠隔接触場面の最初の5分間は予備セッションとして与えられ、実際の分析対象からは排除された。この予備セッションは本調査において二つの大きな意味を持つ。まずは、機器操作及び機械的環境に慣れる時間を配慮するた

めの目的である。

そしてもう一つは、実験の順序的实施による影響を最小化するための工夫であった。今回の調査では、同じ参加者による遠隔接触場面と対面接触場面の順で実験が行われていた。これは、遠隔接触場面が物理的に比較的近距离の二カ所を結んで実施されていたことが大きく関わっている。パイロット・スタディの段階で、本調査とは逆順に(対面接触場面 → 遠隔接触場面)同じ参加者による両場面の談話収集を行ったこともあったが、実際のセッション終了後の調査で、このような行為が意図的に二者間を引き離す結果となり、参加者が遠隔接触場面の設定と参加に関して違和感や不自然さを認識していたことが報告された。

本研究は、同じ参加者から二つの場面のデータを収集することが必需である。そして問題は、実験の手順そのものよりも、極力自然なインターアクションの場面を設定し、初対面だった参加者間の親密度変化が分析対象の談話データに及ぼす影響力をどこまで削減・削除できるかということであった。そこで、本セッションに入る前段階として、基本情報交換及びラポール形成のための予備セッションを設け、本セッションにおける自己開示につながるようにした。

本セッションでは、「自分の家族観・結婚観」がトピックとして与えられた。このトピックは比較的身近な話題で情報に関する特定の事前準備が不必要であること、話題参加への圧迫感が比較的少ないこと、そして異なる環境的背景と個々の文化を持つ参加者同士が情報や意見を交換できることで、活発なインターアクションを行うに適した話題であると予測された。

そして実験直後は、用意したアンケート用紙に実験に関する感想、意見などを書いてもらったが、その具体的内容はシステムの音声、映像、コミュニケーションの伝達性に関するレベル測定の項目と参加動機、気になった点に関する質問などで構成された。最後に、録音と録画のデータを整理、文字化資料に基づいてフォローアップ・インタビューを実施した。

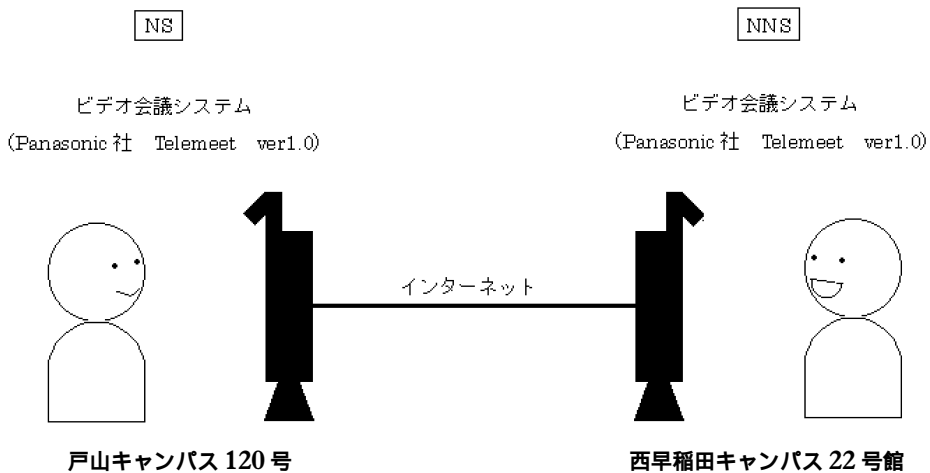


図1 ビデオ会議システム使用図

5. 分析の枠組み

5-1. 通常の turn-taking

メイナード(1993)によると、「turn-taking」とは、会話において一人の発話が話す権利を行使する会話中の単位で、会話の当事者によりその何らかの意味または機能を持っていると認められたものである。そして「turn」については、一人の話し手が話し始めてから次の話し手が話し始めるまでを意味する概念として捉えている場合が多いが、李(1995)では、一人の話し手が始めてから、話し続けることをやめるまでを指すものであると、turn についてより厳密な定義を下している。そしてこの「話し続けることをやめる」ことに関して、① 話す機会を他の会話参加者に譲るため、今までの話し手が話し続けることをやめること、② 話がもう終わったので、今までの話し手が話し続けることをやめること、③ 話がまだ終わっていない時、他の会話参加者の発話による遮りで、今までの話し手が話し続けることをやむを得ずやめること、このような三つの場合に分類している。また、話者が交替される局面の談話においては、一定の標識(marker)が観察でき、この標識を使用することによって、会話参加者は話者交替の調節を行っているのであると述べている。

本稿では、遠隔接触場面と対面接触場面において、どのような turn-taking が、どれぐらい行われているのか、turn-taking をめぐるインターアクション問題とその処理過程を検証した。通常の turn-taking は、NS から NNS へと、そして NNS から NS へ話し手が変わる「話者交替」と、発話終了後、再び同じ話し手が発話を行う「話者維持」に分けて考える。「話者維持」の場合は、再自己選択型とも言え(〔例 1〕参照)、分類の詳細は次の表 3 で示す。

表 3 通常の turn-taking の分類

話者		パターン		内容
話者 交替	NS ↓ NNS	1	「NS↓⇒NNS」型	NS の発話が終了したため発話持続をやめ、NNS が発話を開始する場合
		2	「NS↑⇒NNS」型	NS の発話と関連して、NNS に発話順番を意図的に譲歩する場合(質問をする、同意や共感、確認を求めるなど)
	NNS ↓ NS	3	「NNS↓⇒NS」型	NNS の発話が終了したため発話持続をやめ、NS が発話を開始する場合
		4	「NNS↑⇒NS」型	NNS の発話と関連して、NS に発話順番を意図的に譲歩する場合(質問をする、同意や共感、確認を求めるなど)
話者 維持	再自己 選択	5	「NS⇒NS」型	NS が一つの発話を終了したが、NNS に turn を譲らず、NS の異なる発話が連続する場合
		6	「NNS⇒NNS」型	NNS が一つの発話を終了したが、NS に turn を譲らず、NNS の異なる発話が連続する場合

5-2. turn-taking の問題と処理過程

以上のような通常の turn-taking と異なり，turn-taking におけるインターアクション問題には，主に「沈黙」と「発話重複」がある．本稿では，これらの問題が接触場面においてどのように処理されているのか，言語管理のプロセスから turn-taking の検証を行った．遠隔接触場面では，参加者はいつ，どのように turn を めば良いのかを把握するのが対面接触場面より困難であり，その原因としては，音声と映像の時間的ずれや，視線の不一致により相手とのインターアクションで適切なタイミングを みにくいことが考えられる．

表 4 沈黙の処理の分類

話者	パターン		内容
話者 交替	1	「NS⇒(...)⇒NNS」型	話し手が発話を終了・譲渡したが，相手が発話を開始しないため，不適切な沈黙が発生し，その後，他の参加者が発話を開始する場合
	2	「NNS⇒(...)⇒NS」型	
話者 維持	3	「NS⇒(...)⇒NS」型	話し手が発話を終了・譲渡したが，相手が発話を開始しないため，不適切な沈黙が発生し，再び話し手が発話を開始する場合
	4	「NNS⇒(...)⇒NNS」型	

表 5 発話重複の処理の分類

話者	パターン		内容
話者 交替	聞き手の 割り込み 成功	1 「NS⇒[NS・NNS]⇒NNS」型	話し手が発話を終了していないが，相手の発話により一度発話が遮られ，今までの話し手がやむを得ず発話を中止する場合
		2 「NNS⇒[NNS・NS]⇒NS」型	
話者 維持	聞き手の 割り込み 失敗	3 「NS⇒[NS・NNS]⇒NS」型	話し手が発話を終了していない時，相手の発話により一度発話が遮られたが，話し手が発話を続ける場合
		4 「NNS⇒[NNS・NS]⇒NNS」型	

但し，「沈黙」の問題に関しては注意を要する．これは turn-taking の失敗によって生じるポーズを指すが，一瞬発話が休止されているとしても「その...，あの...，ええと...」など，話し手が適切な表現を模索していることを表している語句が前置する場合⁵，また，語句としては現れていないが，フォローアップ・インタビューにより，意識の中で同様のプロセスの存在が確認された場合は，turn-taking におけるインターアクション問題の一環としては取り扱わない．

「沈黙」と「発話重複」が発生した場合に関しても，先行する発話の話し手が，turn をとり，

⁵ 水谷 (2001) は，自分の話を続ける意図を示す目的を持ち，自分の発言の場，いわゆる turn を守るためのものであると記述している．

話者が維持される場合と、他の参加者が新しく turn をとり、話者が交替される場合に分け、接触場面の沈黙問題処理と発話重複問題処理における NS と NNS の役割を検証した。分類の詳細は表 4 と表 5 に示す。

6. 分析結果

音声と映像の時間的ずれのため、遠隔接触場面では対面接触場面のような turn-taking がうまくできず、不自然な「ポーズ」が発生したり、二人の発話が重なったりするケースが多く観察された。そこで、通常の turn-taking と、turn-taking におけるインターアクション問題として「沈黙」と「発話重複」を取り上げた。

6-1. 通常の turn-taking

各会話における通常の turn-taking を下位項目別に分類し、まとめた結果が表 6 である。

表 6 通常の turn-taking (各型の右側の単位は%)

接触場面	NS⇒NNS				NNS⇒NS				再自己選択				計
	1型		2型		3型		4型		5型		6型		
遠隔 1	73	27.5	55	20.8	108	40.8	13	4.9	12	4.5	4	1.5	265
対面 1	47	34.8	17	12.6	59	43.7	7	5.2	3	2.2	2	1.5	135
遠隔 2	138	32.3	72	16.9	166	38.9	34	8.0	16	3.7	1	0.2	427
対面 2	92	32.7	48	17.0	110	39.1	20	7.1	11	3.9	0	0.0	281
遠隔 3	228	42.6	43	8.0	180	33.6	78	14.6	5	0.9	1	0.2	535
対面 3	271	45.2	27	4.5	271	45.2	30	5.0	0	0.0	0	0.0	599
遠隔 4	122	36.0	43	12.7	157	46.5	14	4.1	2	0.6	0	0.0	338
対面 4	169	43.1	29	7.4	176	44.9	18	4.6	0	0.0	0	0.0	392
遠隔 5	209	45.2	23	5.0	200	43.2	29	6.3	0	0.0	1	0.2	462
対面 5	222	45.2	17	3.5	227	46.2	22	4.5	2	0.4	1	0.2	491
遠隔 6	200	43.8	33	6.7	208	45.1	18	3.9	1	0.2	1	0.2	461
対面 6	191	43.2	30	6.8	203	45.9	16	3.6	1	0.2	1	0.2	442
遠隔 7	104	41.8	22	8.8	100	40.2	20	8.0	3	1.2	0	0.0	249
対面 7	103	43.6	16	6.8	107	45.3	10	4.2	0	0.0	0	0.0	236
遠隔 8	161	32.3	85	17.1	227	45.6	18	3.6	6	1.2	1	0.2	498
対面 8	235	45.0	25	4.8	248	47.5	13	2.5	1	0.2	0	0.0	522

turn-taking で話者が交替されるパターンの「1型」と「3型」は、話し手の発話が終了したた

め発話持続をやめ、他の参加者が発話を開始する場合を指す。現在の話し手による発話終了後、新しい話者が発話をはじめ、通常の turn-taking の中でも最も多いパターンである。このような「1型」と「3型」の場合、全体の turn-taking の中で占める割合は、遠隔接触場面より対面接触場面のほうが高い傾向を示す。

次に「2型」と「4型」であるが、これは、話し手の発話と関連して、他の参加者に発話順番を意図的に譲る場合を示し、具体的には、質問をしたり、同意、共感、確認などを求めたりする場合が挙げられる。「1型」「3型」に比べ、より積極的な turn-taking のパターンであり「他者管理」も深く関連していると思われる。

表6の結果から、NSが意図的、積極的にturnをNNSに譲る「2型」は、全ての会話で、遠隔接触場面が対面接触場面より高い割合を、少なくともほぼ同様な割合を占めていることが分かった。これは、対面接触場面よりturn-takingが困難である遠隔接触場面において、NNSとのインターアクションをより円滑に進行させようとするNSの意識的なはたらきであると思われる。また、このような意識のはたらきは上級NNSにおいても観察された。上級NNSが参加する会話では、全ての場合、遠隔接触場面で対面接触場面より高い割合を示している。一方、中級NNSが参加する接触場面では、各参加者により結果が多少異なり、NSや上級学習者のような傾向を確認することはできなかった。このように、NS、中級NNS、そして上級NNSの間にturn-taking問題の処理をめぐる相違点が観察された結果を「言語管理理論」に照らして考察すると、二つの原因が考えられる。

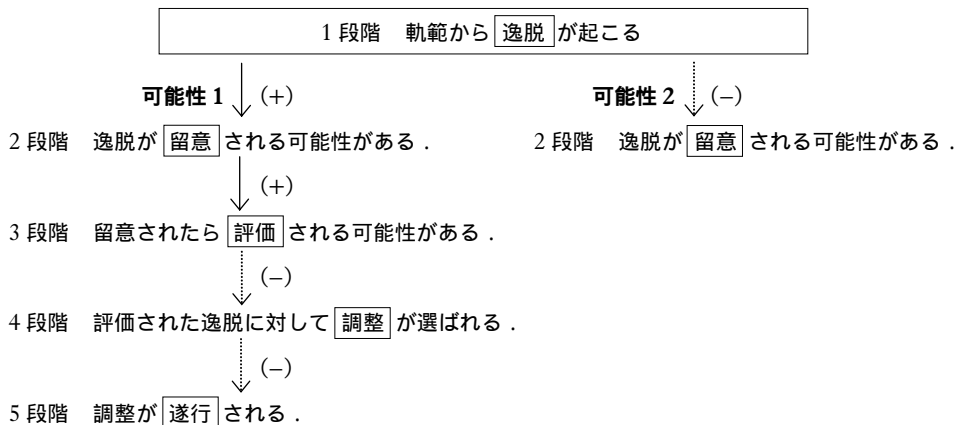


図2 turn-takingにおける言語管理のプロセス

まず、通常の対面接触場面の規範と異なる「逸脱」、すなわち turn-taking におけるインターアクション問題が起こる。そこで次に「留意」の段階であるが、この逸脱に留意する可能性は、NNSよりはNSが、中級NNSよりは上級NNSが高いと思われる。さらにもう一つ、問題

解決のため「調整」が選ばれる段階で、違いが生じる可能性が高い。接触場面に参加する NS と NNS がともに、turn-taking の問題に留意し、インターアクションにおいてマイナスであると「評価」を下したとしても、NNS が問題解決のために適切な「調整」を選び、それを「遂行」することは NS ほど容易ではない。問題認識が逆に円滑なインターアクションの阻害要因として作用する可能性も考えられる。従って、調整を選び、遂行する段階で、もう一度、NS と NNS、そして中級 NNS と上級 NNS の「言語管理」に差ができると考えられる。

続いて、再自己選択のパターンである「5型」と「6型」に関しては、中級 NNS が参加する場面と上級 NNS が参加する場面の間に相違点が見られた。中級 NNS が参加する接触場面の場合、遠隔接触場面と対面接触場面における「5型」と「6型」の割合が、ほぼ同じ、もしくは遠隔接触場面のほうが高い割合を示している。しかし、上級 NNS が参加する接触場面では、このような傾向が見られない。また、各接触場面においては、NS による再自己選択のパターンである「5型」が、NNS による「6型」より数多く観察されている。すなわち、NS のほうが NNS より再自己選択の turn-taking を使用する場合が多かった。以上、接触場面における通常の turn-taking を考察した結果、遠隔接触場面には対面接触場面により会話を管理する意識が強く観察され、NNS より NS が turn-taking における調整を積極的に遂行する傾向が現れた。

[例 1] turn-taking の再自己選択(「NS⇒NS」型)

遠隔接触場面(話題: NNS の結婚観)

- 1 NS8 : うん、うん、NNS さんはどうですか↑。
 - 2 NS8 : どういう結婚をしたいと思いますか↑。
 - 3 NNS8: やっぱり恋愛結婚したいですけど。
-

6-2. 沈黙の処理過程

ビデオ会議システムを介した遠隔接触場面では、同じ参加者の対面接触場面より沈黙の問題が数多く観察された。前述した通常の turn-taking からの逸脱とも言える「沈黙」の問題が数多く観察されるのは、遠隔接触場面特有のインターアクション問題であると思われる。表 7 は、観察された「沈黙」の問題と処理過程を下位項目に分類し、まとめたものである。

まず全体的に、同じ参加者の両場面を比較してみると、NNS の習得レベルに関係なく対面接触場面より遠隔接触場面で、沈黙の問題が多発しているが、中級 NNS が抱えている沈黙の問題は、遠隔接触場面と対面接触場面の両方で上級 NNS より高い数値を示している。このことは、NS と同じ空間を共有して行われる対面接触場面においても、上級 NNS に比べ、習得の途中であり、turn-taking が充分習得されていると言えない中級 NNS にとって、接触場面に

参加し、上手く turn-taking を行うことは、より困難なインターアクション経験であると言える。

こうした沈黙の発生を大きく分けると、NS の発話後、NNS による turn の獲得失敗から起因する沈黙と、NNS の発話後、NS による turn の獲得失敗に起因する沈黙が存在する。分類項目の「1 型」と「3 型」は前者に、また「2 型」と「4 型」は後者に属する。「沈黙」が現れた総数から、この二つの沈黙を比較してみると、NS の発話終了後に沈黙が発生するケースが多いことが分かる。つまり、NNS が turn を獲得できなかったため、turn-taking の問題が起きやすいという傾向を示している。

表 7 沈黙の処理

接触 場面	話者交替		話者維持		計
	1 型 「NS⇒(...)⇒NNS」	2 型 「NNS⇒(...)⇒NS」	3 型 「NS⇒(...)⇒NS」	4 型 「NNS⇒(...)⇒NNS」	
遠隔 1	1	1	4	0	6
対面 1	2	0	1	2	5
遠隔 2	0	3	4	2	9
対面 2	1	1	4	1	7
遠隔 3	1	2	2	0	5
対面 3	0	0	4	1	5
遠隔 4	2	2	3	2	9
対面 4	0	1	1	0	2
遠隔 5	0	2	1	3	6
対面 5	0	1	0	0	1
遠隔 6	2	0	2	1	5
対面 6	1	1	0	1	3
遠隔 7	2	3	3	2	10
対面 7	0	0	0	0	0
遠隔 8	0	0	2	0	2
対面 8	0	0	1	0	1

NS の発話後に発生した沈黙問題処理に関しては、「1 型」より「3 型」の場合が多いことから、NS が沈黙の問題を留意し、再び自分が turn を獲得、発話を始めることで、インターアクション問題を処理する傾向が強いと言える。一方、NNS の発話後、沈黙の問題が起きた場合の処理に関しては、「2 型」と「4 型」の数値がそれほど変わらず、ほぼ同様の結果を見せている。NNS の発話後 turn-taking の失敗による沈黙が生じると、相手の NS が素早く問題を認識し、turn を獲得したり、また NNS が再び turn を獲得するなど、問題を処理しているのである。

さて、李(1995)では、発話順番が交替される局面の談話においては、一定の「標識(marker)」が観察でき、この標識を使用することによって、会話参加者は話者交替の調節を行っているとして述べている。本調査で明らかになった沈黙問題の発生とその処理過程をこの見解から考えてみると、遠隔接触場面では「標識(marker)」を表示することと、これを認識することが対面接触場面より困難であり、この問題は上級 NNS より中級 NNS にとってその影響が大きいと思われる。遠隔接触場面の特色が原因となり、turn-taking に関連するインターアクション問題が発生した場合、問題を留意、調整を遂行する「言語管理」は NS と NNS 両方で観察されたが、NS には「自己管理」に加え「他者管理」も観察された(尹 2003b)。

6-3. 発話重複の処理過程

先にみた遠隔接触場面における、発話順番の交替の「標識(marker)」を表示、認識することの問題は、「発話重複」にも深く関連していると思われる。発話重複の側面から、同参加者の両場面を比較した結果、遠隔接触場面でインターアクション問題が多く観察された。しかも、発生の総数からみて、「沈黙」の問題より多発していることが分かる。

表 8 発話重複の処理

接触 場面	話者交替(聞き手の割り込み成功)		話者維持(聞き手の割り込み失敗)		計
	1 型 「NS⇒[NS・NNS]⇒NNS」	2 型 「NNS⇒[NNS・NS]⇒NS」	3 型 「NS⇒[NS・NNS]⇒NS」	4 型 「NNS⇒[NNS・NS]⇒NNS」	
遠隔 1	3	2	7	0	12
対面 1	2	0	0	0	2
遠隔 2	8	6	7	0	21
対面 2	1	0	2	0	3
遠隔 3	1	4	0	0	5
対面 3	1	2	0	0	3
遠隔 4	2	1	2	1	6
対面 4	1	1	1	0	3
遠隔 5	8	3	1	10	22
対面 5	2	2	3	0	7
遠隔 6	2	4	1	2	9
対面 6	2	4	1	2	9
遠隔 7	1	0	0	1	2
対面 7	1	0	0	1	2
遠隔 8	5	3	3	1	12
対面 8	2	2	0	1	5

「発話重複」は「沈黙」より数多く観察されているが、NNS の習得レベルによる違いは観察できなかった。また発話重複は、NS の発話に NNS の発話が重ねられる場合と、NNS の発話に NS の発話が重ねられる場合に分けることができる。「1 型」と「3 型」が前者の NNS の割り込みによる問題発生であり、「2 型」と「4 型」は後者の NS の割り込みによる場合である。発話重複問題の総数からみると、NNS が NS の発話に割り込む場合が多いが、各会話により異なる結果を示しているため、一定の傾向を述べることはできない。

では、このような発話重複の問題が生じた場合、どのように処理されているのかについて考察してみよう。表 9 と表 10 は、場面別、NNS の習得レベル別に、そして発話重複により話者が交替される場合と維持される場合を区分し、まとめたものである。まず、NS の発話に NNS の発話が重ねられ、NNS が割り込んだケースからみていく。表 9 と表 10 からみると、中級 NNS は、接触場面の種類に関わらず、NS の発話が自分の発話に重ねられ、発話重複の問題が発生した殆どの場合に、自分の発話を中止し、NS に turn を譲ることで問題を処理している。一方、中級 NNS に比べて上級 NNS は、NS の発話が重ねられても、そのまま turn を維持する割合が高い。また、発話重複の問題で、NS と中級 NNS の会話では、遠隔接触場面と対面接触場面の両方で、NNS の割り込みが原因となる場合が多く、NS と上級 NNS の会話では、NS の割り込みにより発話重複が発生することが多い。

表 9 遠隔接触場面における発話重複の問題処理

	NNS が割り込んだ場合				NS が割り込んだ場合			
	割り込み成功		割り込み失敗		割り込み成功		割り込み失敗	
NS — 中級 NNS	14	31.8%	16	36.4%	13	29.5%	1	2.3%
NS — 上級 NNS	16	35.6%	5	11.1%	10	22.2%	14	31.1%

表 10 対面接触場面における発話重複の問題処理

	NNS が割り込んだ場合				NS が割り込んだ場合			
	割り込み成功		割り込み失敗		割り込み成功		割り込み失敗	
NS — 中級 NNS	5	45.4%	3	27.3%	3	27.3%	0	0.0%
NS — 上級 NNS	7	30.4%	4	17.4%	8	34.8%	4	17.4%

7. まとめと今後の課題

本稿では、遠隔接触場面と対面接触場面の談話データを「turn-taking」の角度から調査、分析を行った。その結果、通常の turn-taking では、話し手の発話と関連して、NS と NNS が、

相手に発話順番を意図的に譲るタイプの turn-taking が、遠隔接触場面でより多く観察された。特に NS は、以上の傾向が著しく、対面接触場面より turn-taking が困難である遠隔接触場面において、NNS とのインターアクション問題に遭遇した場合、NS がより意図的、積極的に turn-taking 問題を処理していたと思われる。中級 NNS と NS による会話では、NS による再自己選択型の turn-taking と NNS による再自己選択型の turn-taking が同様の割合で観察されたが、上級 NNS と NS の会話では NS による再自己選択型の turn-taking が多く観察された。そして NNS の習得レベルに関わらず、「沈黙」と「発話重複」の問題は、対面接触場面より遠隔接触場面で数多く観察された。中級 NNS が参加する接触場面で、上級 NNS より沈黙の問題が多発していたが、発話重複問題に関しては、NNS の習得レベルによる相違点は見られなかった。沈黙発生のパターンとしては、NS の発話後 NNS が turn の獲得に失敗し沈黙が留意される場合が、NNS の発話後沈黙が発生する場合より多かった。NS の発話後に発生した沈黙の問題に関しては、NS が再び turn を獲得する「自己管理」で処理される傾向が著しい。しかし、NNS の発話後に発生した沈黙の処理は、NNS による「自己管理」とともに、相手の NS による「他者管理」と並行して行われていた。中級 NNS は、自分の発話に相手の発話が重ねられ、逸脱が生じると、殆どの場合自分の発話を中止し、相手に turn を譲ることで問題を処理していたが、上級 NNS の場合は NS の割り込みがあっても、自分の turn を維持する場面が多かった。

遠隔接触場面において turn-taking と関連するインターアクション問題がより多く発生し、言語管理が行われていたことが明らかになった。また、インターアクション問題に対する調整遂行の役割は日本語学習者より母語話者が、そして中級学習者よりは上級学習者が積極的に行っている傾向が示され、turn-taking の問題処理においては非母語話者の習得レベルより接触場面の種類が深く関連していたことも確認された。

一方本稿では、NS と NNS の参加による遠隔接触場面と対面接触場面を分析対象に考察を行ったが、音声と映像の時間的ずれのような物理的問題、空間の非共有による心理的距離感は当然ながら NNS のみならず NS の発話行為にも影響を与えているのである。そのため、NS と NNS の参加者による接触場面の場合のみならず、NS 同士による「内的場面」を対象に対面と遠隔の談話を考察する必要があると思われる。内的場面を検証することによって、接触場面を考察する標準データを得ることができ、学習者が参加する場面におけるインターアクションの実態をより正確に追究することが可能となる。

また、今回の調査では NS の参加者が全員日本語教育を専攻とする教師経験者であったが、接触場面の研究(村上 1996)によると、参加する NS がこれまで、どのような場面で、どれほど NNS と接触してきたのか、その接触経験がコミュニケーションに影響を及ぼしているという結果が報告されている。そのため、対面接触場面のみならず、遠隔接触場面において、NS の

NNS との接触経験がどのような影響を及ぼしているのかについても検証する必要がある。

ビデオ会議システムは、未だ十分開発されていない新しい教育リソースではあるが、今後技術的發展とともに、更なる進歩が期待される。これまでは、新しいシステムの開発に追いつき、日本語教育の新しい場면을模索してきた段階と思われる。しかし今後は、開発された新システムをどのように応用していくかを考慮するだけでなく、様々な遠隔接触場면을徹底的に検証し、どのような設備、どのような機能が求められているのか、日本語教育の観点から積極的にはたらきかけていくべきではないだろうか。日本語の遠隔教育が必要とする、教材、教授法、そして場面のバリエーションにおける特色を充分考察した上で、より良い教育システムの開発に貢献するためには、独創性と展開性のある新しい日本語教育の試みが求められている。

謝 辞

本稿を完成させるにあたり、多くの方々からご指導、ご協力をいただきました。ここに改めて深く感謝申し上げます。早稲田大学大学院日本語教育研究科の宮崎里司先生をはじめ諸先生方、早稲田大学の情報企画課ならびに早稲田インターナショナルの関係者各位の御厚意に感謝申し上げます。

参 考 文 献

- ファン, S. K. (1998) 「接触場面と言語管理」 特別研究「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」 会議要録, 国立国語研究所.
- 福永 厚・渡辺 理・勝山恒男 (1993) 「テレビ会議コミュニケーションの評価」 『Human Interface』 第9回シンポジウム論文集: 29-36, ヒューマンインタフェース学会.
- 李 麗 燕 (1995) 「日本語母語話者の会話管理に関する一考察: 日本語教育の観点から」 『日本語教育』 87号: 12-24, 日本語教育学会.
- 町田延代 (1995) 「電話における日本語のフォリナー・トーク・ディスコース: 非母語話者の言語能力と調整・交渉」 南山大学大学院外国語学研究科日本語教育専攻修士学位論文.
- 町田延代 (1997) 「電話におけるフォリナー・トーク・ディスコースの違い: 日本語非母語話者の言語能力と交渉」 『第二言語としての日本語の習得研究』 第1号, 第二言語習得研究会編: 83-100, 凡人社.
- メイナード泉子 (1993) 『会話分析』, くろしお出版.
- 宮崎里司 (2001) 「パソコンテレビ会議システムを利用した日本語教育の試み」 『留学生教育』 5号: 91-107, 留学生教育学会.
- 宮崎里司 (2002a) 「第二言語習得における意味交渉の課題」 『早稲田大学日本語教育研究』 創刊号: 71-89, 早稲田大学大学院日本語教育研究科.
- 宮崎里司 (2002b) 「接触場面の多様化と日本語教育: テレビ会議システムを利用したインタラクティブ能力開発プログラム」 『講座日本語教育』 第38号: 16-27, 早稲田大学日本語研究教育センター.
- 村上かおり (1996) 「日本語における母語話者と非母語話者とのインタラクション: 外国人との接触経験とタスクとが母語話者側のインタラクションの仕方に与える影響」, 南山大学大学院外国語学研究科日本語教育専攻修士学位論文.
- ネウストブニー, J. V. (1995) 「日本語教育と言語管理」 『阪大日本語研究』 7号: 67-82, 大阪大学.
- 植松尚幹・林 正和・岩崎昭浩・小松原明哲 (1994) 「同期分散四者間通信システムでの会話特質」 『人間工学』 第30巻 特別号: 132-135, 日本人間工学会.
- 山本雅代 (2000) 「第七章「母語教育」実施への模索: コンピュータ利用の遠隔指導」 『日本のバイリンガル

- 教育』: 251-289, 明石書店.
- 尹 智 鉉 (2002) 「遠隔接触場面における日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー」『社会言語科学会 第 10 回研究大会予稿集』: 12-14, 社会言語科学会.
- 尹 智 鉉 (2003a) 「日本語母語話者と学習者の遠隔接触場面におけるインターアクション」, 早稲田大学大学院日本語教育研究科修士号学位論文.
- 尹 智 鉉 (2003b) 「遠隔接触場面における調整軌道: ビデオ会議システムを用いた日本語教育の試み」『日本語教育学会春季大会予稿集』: 189-194, 日本語教育学会.